

## 最

近の研究テーマの関係で、ここところ歴史資料館をずいぶんと訪ねている。ここ1年間だけでも、ワシントン、ロンドン、ジュネーブ、クライストチャーチ、東京と訪ねた。

研究の本筋とは離れるテーマでも、思わず心を奪われてしまう資料に巡り合うことがある。その映

## 引き揚げと帰還

@Canberra

像には、キャンベラの戦争記念館で、出会った。

英国のジャーナリストが、終戦の翌年1946年に撮ったニュース・リールだった。春まだ浅き3月の寒さの残る釜山港が映っている。遠くに望める山々は、まだ雪化粧をしたままだ。

吹きさらしの栈橋を、大勢の人

たちが無秩序に行き来する。誰もが抱えられるだけの荷物を運んでいた。中身はわからないが、自分の身長以上に高い唐草模様の包みを背負ったお年寄りがある。その腰は、もともと曲がっていたのか、それとも荷物の重みで曲がったのか。3歳くらいの女児と手をつなぎ、片手で乳児を抱えた母親の背中には、大きくて重そうなりユックサクがある。その3歳くらいの女児の背中にも、風呂敷包みが縛り付けられてあった。

しばらく満足な食事にありついていないのだろうと思う。誰もが、疲労困憊し、意気消沈し、憔悴していた。つらい体験をしたばかりなのか、顔から表情がすっかりと消え去ってしまった歳若い女性もいた。

ある集団は、朝鮮半島から日本にこれから引き揚げる者たちであり、また他の集団は、日本から祖国に帰還してきたばかりの者たちである。両者とも、当時法的には日本臣民だった。同じ日本臣民が、

凍りつきそうな釜山の港で、それぞれの想いを胸に秘めながら、「引き揚げ」と「帰還」という立場に分かれて交差した。

雑踏し混乱する栈橋に、10歳くらいの坊主頭の痩せた半ズボン姿の少年が、1人でたたずんでいた。寒空の下、少年はぼんやりと人の動きを眺めている。寒いのか、少年は時々足踏みをしたり、手を擦り合わせたりする。カメラに気付いた少年が、精一杯笑い掛けようとしても、その頬は引き曇っていた。

貧しいし、惨めだ。それが一般の人たちにとっての戦争であり、戦後処理なのだと思う。

でも少年の目には、希望の光が宿っていた。

日本臣民の少年は、「内地」から朝鮮に帰還してきたばかりなのか、それともこれから「内地」に引き揚げるところなのか？

寒さに震える痩せた少年の目は、場違いにきらきらと輝いていた。